

# ラテン = アメリカにおける考古学上の諸問題

—メキシコのオルメカ文化についての一視点—

貞末堯司

## 目次

1. はじめに
2. オルメカ文化のメキシコ中央高地帯への影響について
3. メキシコ中央高地におけるオルメカ文化
4. むすび

## 1. はじめに

メキシコのベラクルス州及びタバスコ州を中心とする、いわゆるメキシコ湾岸低地には、古くからオルメカ文化が栄え、メソ＝アメリカの他の地域に比較して、独得な特色をもった文化が存在していたことが知られている。このオルメカ文化については、多くの疑問が考古学的にも、民族学的にも提出され、現在にいたるも、なおその本質的な内容は不明のまま残されているといっても過言ではない。特に、オルメカ文化に関する資料が、最近の発掘資料や調査、研究によって増大するにつれて、その文化のもつ特性や他地域への影響に関して、更に一層の複雑な議論が目立ち始めたことも否定することはできない。しかし、オルメカ文化のもっている特異性が知られるようになったのは、それ程新しいことではない。セロ＝デ＝ラ＝メザス、ラ＝ベンタ、トレス＝サポテス、サン＝ロレンソなどの遺跡とともに、巨大な人頭石像や宗教上の構造物が知られるようになり、特に多くのオルメカ様式の石彫や土器などが、メキシコの各地から発見されるようになって、この特異な文化への興味と関心は大きなものとなっていった。しかも、その内容が次第に解明されるにつれて、オルメカ文化が、古代メソ＝アメリカ文化の基盤を形成するものではないかと考えられるようになって、オルメカ文化への学問的興味は、更に大きなものになっていったのである。しかも、その文化が、あまりにも独得な内容をもっていることもさることながら、メキシコ湾岸低地帯はもちろん、メキシコ中央高地帯、いわゆるマヤ地域、ガテマラ、エル＝サルバドルなどの隣接する諸地域においても、かつてオルメカ文化が波及し、その影響によって、多くの地方的、或は、地域的な文化が形成されていったのではないか、という疑問が提出されるに及んで、オルメカ文化に対する考古学的な追求は、にわかに盛んになってきたのである。

メキシコにおける古代文明を語る場合、オルメカ文化を忘れることはできない。それは上述の如く、それがメソ＝アメリカ古代文明にとって、特殊な位置と特別な意味をもっているからである。この小論では、メキシコ湾岸の熱帯低地に発生したオルメカ文化が、メキシコの古代文明にとって、どのような意味をもつのか、特に、メキシコ中央高地帯文化に及ぼした、オルメカ文化の影響をどのように考えればいいのかについて、一つの視角を述べようとするものである。ある文化が、他の地域に影響を及ぼした場合、その文化の影響を受けた地域には、全く同じ文化が開花するのか、それとも、文化的影響を与えた文化その物は、地域的、地方的なものによって、変化し、変容していくのか、といった文化の波及や伝播についての多くの考え方や議論が存在することも事実であるが、オルメカ文化の影響をうけたと考えられる、メキシコ中央高地帯は、これら特殊な問題に対する考古学上の一つのよい事例ではないかと考えられる。従って、オルメカ文化の影響は、メキシコ中央高地帯では、どのように発現し、どの点が、最も顕著なオルメカ文化の影響と考えられるのか、また、どのような証拠によってオルメカ文化の影響を解明することができるのか、といった問題に対してのひとつの考え方を述べてみたいのである。

勿論、古代における文化の波及、伝播、その影響といった性質の問題は、資料に対するアプローチの仕方、資料に対する解釈の仕方、処理の仕方などによって、大いにその結論が異なってくる。また、資料をどのように処理し、解釈しても、動かさない事実を物語る資料と、文化的要素の変容を物語る資料など、資料の中にも多くの態様があることも事実である。この様な場合、どの資料によって、何を結論づけるかが、大きな問題となってくる。オルメカ文化の問題に関してそのメキシコ中央高地帯への影響といったテーマをとりあげたのは、正に資料処理の問題が問題になるからである。従って、本論稿は、オルメカ文化の資料に対する、一つのアプローチをした試論であるといっても過言でなく、それだけに、その結論に対しては、多くの疑問もあるし、反対もあると考える。大方の御批判、御叱正をお願いする次第である。

## 2. オルメカ文化のメキシコ中央高地帯への影響について

メキシコのモレーロス、ゲレロ、プエブラ州などを中心とするメキシコ中央高地を形成する諸州には、多くの古代遺跡があるが、これら遺跡からは、いわゆる「オルメカ様式」とよばれる遺物が数多く発見されている。もちろん、オルメカ文化の本拠地は、ベラクルス州、タバスコ州を中心とする、メキシコ湾沿岸の熱帯低地帯であることにはかわりはないが、いわゆる「オルメカ様式」といわれる遺物は、地理的には、はるかに広い分布圏をもっているのである。例えば、ゲレロ州の太平洋岸の山岳地帯から、更に南にのびて、エル＝サルバドル、ガテマラの東南地帯一帯に広がるものも事実である<sup>1)</sup>。

このような点から考えると、オルメカ様式の遺物は、或いは、本拠地のメキシコ湾岸低地帯に発見されるものよりも、他の地域に発見されるものの方が、量的にはるかに多くなっていく。しかし、これらの地域に発見されるオルメカ様式の遺物は、必ずしも考古学上の調査、発掘によって得られたものではなく、多くの場合が、盗掘によるか、個人的な好事家の蒐集品かである場合が多いのである。従って、それらオルメカ様式の遺物が、編年的にも層位的にも、どのような位置をもつものであるのかは、必ずしも正確に知ることができない場合が多く、この意味では、極めて骨董品的な意味しかもたないものも多いのである。しかし、資料としては、これらの遺物が収集された場所は、オルメカの要素が波及し、少なくともかつて、そこにはオルメカ文化が何等かの形で到達したものと考えざるを得ないのである<sup>2)</sup>。

しかし、オルメカ様式の遺物の量を比較して、オルメカ文化の本当の根拠地は、むしろ内陸部特にメキシコ中央高地を中心とする地域ではないのかといった疑問も提出されることになるのは当然である<sup>3)</sup>。しかし、オルメカ文化中央高地起源論といった一つの推定は、前述の如く、その資料の大部分が考古学的に発掘調査された資料に基礎をおいたものではないだけに、多くの研究者の間にも意見の対立があることも事実である。しかし、メキシコ中央高地帯のオルメカ文化に関しては、基本的な問題として、果して、メキシコ中央高地帯にオルメカ文化が本当に発現したのか、どうかについての疑問の方が重要である。メキシコ中央高地帯の諸文化の中で、オルメカの要素は、無視することができないとすれば、果してこの要素は、どのような契機によって、メキシコ中央高地帯に発現したのか。つまり、メキシコ湾岸の低地帯オルメカ文化が、メキシコ中央高地帯に、「このような契機」によって、また、「このような径路」を通して入ってきたからメキシコ湾から遠くはなれた地帯にオルメカの要素が出現したのであるといったことが、実証されなければならないのである。

しかし、これらの問題も、メキシコ湾岸低地帯オルメカ文化の時間的な位置とメキシコ中央高地帯の、いわゆる高地オルメカ文化の時間的位置が、どのような関係にあるのかという両地域の編年的な関係が、基本的な問題であり、同時に、その問題が解決されなければ、文化波及という根本的な問題は解決されないのである<sup>4)</sup>。

元来、オルメカ文化は、新大陸先史時代の形成期文化の問題として論じられてきた<sup>5)</sup>。つまり形成期文化が、一方はメキシコ湾岸の熱帯低地帯に発現し、一方はメキシコ中央高地帯に発現して、それが相互に形成期段階のどの位置で関連をもってきたのであるかが、中心的な論争点であったのである。そして、オルメカ文化は、少なくとも、中期形成期以降文化としての性格をもち前期形成期には遡らない文化であると考えられてきたのである<sup>6)</sup>。しかし、最近の資料の増大は従来のこのような編年的位置に対して、疑問をなげかけるようになったのも事実である。ある文化が、ある文化的段階の要素をもち、その段階を前提として、文化的要素を比較し、地域的關係などを論じてきたのに対して、前提となるある文化的段階（時間的な経過の中でのある一つの時期を

意味する) 自体に疑問が生じた場合には、比較すべき文化要素の内容は変わらないにしても、文化的伝統の変化や系譜、時代的位置関係から生じる文化的影響の問題などは、従来とはまったく異なった結論に到達せざるを得なくなるであろう。例えば、メキシコ湾岸オルメカ文化の代表的な遺跡であるラ=ベンタ (La Venta)<sup>7)</sup> とサン=ロレンソ (San Lorenzo)<sup>8)</sup> などから発見される遺物が、同時代、或は、同文化段階であることを前提として、その歴史を考えた場合、仮に、前者は、後者の後の文化であるということが判明した場合には、オルメカ文化の編年が変わることは勿論、その文化的系譜は、全く新しい結論に到達せざるを得ないのである。このような事態がおこることは、オルメカ文化に関しては、当然考えられることであり、特に、最近のサン=ロレンソ遺跡の発掘では、オルメカ文化は時間的に極めて長い文化で、従来中期形成期の段階と考えられた文化段階よりも、更に古くなってくるものようである<sup>9)</sup>。しかも、それがラ=ベンタ、サン=ロレンソ遺跡自体の内容の検討によっておこされたものであり、その比較から前者は、後者より新しい段階であって、サン=ロレンソは、少なくとも前期形成期に発現したものであるということになれば、従来、その編年規準で考えられた結論に、かなり大きな修正が加えられなければならないのである。

編年を軸として、オルメカ文化のメキシコ中央高地帯への影響と、その文化の具体的な発現を考えた場合、多くの問題が提出されることになる。それは、メキシコ中央高地帯での最大のオルメカ遺跡と考えられているトラティルコ (Tlatilco) 遺跡<sup>10)</sup>は、メキシコ中央高地帯では、中期形成期の段階であり、しかも、それはメキシコ中央高地のサカテンコ (Sacatenco) 文化と同時代と考えられる遺跡である。中期形成期文化で、しかもトラティルコ文化と同時代的推定を下し得る中央高地帯の遺跡は、ラス=ボカス (Las Bocas) やトラパコヤ (Tlapacoya) などの遺跡がある。このことは、オルメカ=トラティルコのメキシコ中央高地文化は、サカテンコの農耕文化と同時代であるということの意味している。しかし、メキシコ湾岸の低地オルメカ文化は、長い時間的な経過をもった文化であって、その内容も一つの文化段階、つまり中期形成期文化の段階といった単純な内容ではなくて、時とともにその文化的内容は変化し、多様化していった傾向をもっているのである。この様に考えてくると、オルメカ文化の影響が実際に正確にメキシコ中央高地帯に及んだ時期は、何時だったのか。また、それは、オルメカ文化のどのような内容をメキシコ中央高地へ移植していったのか、といった問題の解決をしなければならなくなってくるのである<sup>11)</sup>。

最近のメキシコ谷のトラパコヤ遺跡の発掘で確認された、イスタパルカ (Ixtapaluca) 層は、早期形成期の段階を示し、同時にこの時期にオルメカ様式の多くの遺物を発見している。しかも、イスタパルカ層の土器は、メキシコ湾岸低地オルメカ文化の代表的遺跡である、サン=ロレンソ層の土器と類縁関係をもっていることが確認され<sup>12)</sup>、この点を考えると、低地オルメカも、高地オルメカも、早期形成期に存在したと推定することができよう。つまり、両地域の編年的な問題を考えると、オルメカ文化の伝播とか、影響とかいった問題は、従来のように、単に高地オルメ

カ文化の代表をトラティルコ文化だけに限って想定することは、できなくなりつつあるのである。しかも、それを単に中期形成期文化の段階として把握することには、あまりにも大きな疑問が生じてくるのである。また、トラティルコ文化と同じような内容をもつ遺跡は、メキシコ中央高地には数多く知られるようになってきているが、トラティルコのオルメカ様式と同内容の文化が、他の地域にも多く存在するということになれば、むしろ、トラティルコ文化の編年を、実際には早期形成期文化の段階と考えたほうがよいのではないかと考えられるのである。具体的にいえば、トラパコヤ遺跡のイスタパルカ層とほぼ同時代と考えてもよいのではなからうか。

メキシコ中央高地帯におけるトラティルコ文化のオルメカ様式は、しばしば、次のような特色をもって考えられている。トラティルコでは、巨大な記念碑的遺構、特に、宗教的ピラミッドや巨大な石碑などは知られてなくて、ひじょうにリアリステックな人形土偶や怪獣、怪物といった土製品、二つの頭をもつ土偶、生と死を表わした一人の人面像、その他多くの土器をあげることができるが<sup>13)</sup>、その中でも特長的なものは、土器である。これら土器は、中央アメリカの他の地域では知られていない新しい型式と極めてエキゾチックな器形をしたものが多く、その中でも罎型土器は、特別な意味をもつものである。また、頸部の長い壺や動物と魚を形どった形像土器も独得なものであるが、土器の文様技法には、特に形成期段階に特有な技法が用いられている点は、注意を要するのである。例えば、彩色土器には、沈線で区画された内側に彩色を施すやり方、同じく沈線で区画された内側にロッカー＝スタンピングを行う手法などは、ある意味で、新大陸の形成期土器の施文技法を代表するものであろう。しかも、土器は、殆どが黒色磨研土器であって、光沢をもつ器壁はこれら特異な施文技法と並んで、形成期文化の一つの標識とも考えられているのである。

しかし、このような特色をもったトラティルコ文化も、これら文化要素のうち、では、どれがオルメカ様式の典型であり、どれがオルメカ文化のはっきりした影響の下に生まれたものであるのかといった疑問に対しては、必ずしも明確な答はかえってこないのである。多くの文化内容を詳細に分析してみても、それが、明確に、どのような根源から派生したものであるのかを決定することは、容易なことではないが、特に、メキシコ湾岸の形成期段階での特長的な文化であるオルメカ様式といったものが、現実には、メキシコ中央高地帯で発見されたとなると、実際に、メキシコ湾岸文化に根拠をもつ文化要素の抽出を行わざるを得ないのである。また、メキシコ中央高原で、トラティルコと同一時代と考えられる遺跡の中には、例えば、沈線で区画された内側に、ロッカー＝スタンピング文様をもつ土器を多く出土するものもある。更に、平底で、わずかに外反しながら、立ち上りの顕著な口縁部をもつ褐色の壺がある<sup>15)</sup>。これらは、明かにメキシコ中央高地帯オルメカの代表的文化とも考えられる、トラティルコにも発見される文化要素であり、同時に、オルメカ文化の特色を示すものでもある。また、これら土器の他に多くの人形土偶があり円筒形の刻印 (roller seal) も発見されている<sup>16)</sup>。これらもまたいずれも、オルメカ文化の特質と

考えられるものであるが、では、現実には、どれとどれがオルメカ文化に源をもつものであり、どれとどれが、メキシコ中央高地帯で、オルメカ文化の影響のもとで誕生したものであるか、といった点になると、正確に解答が得られなくなってくるのである。つまり、文化要素の伝播は、現実存在をしたと考えられても、それが、編年的に見て、どちらが時代的に先であったのか、という問題を解決しない限り、文化的伝統の系譜は追求できなくなるのである。メキシコ中央高地帯に、発現したと考えられるオルメカ文化の問題には、前述の様に、文化的な内容自体の問題があり、それは、同時に、密接に編年の問題とも関連をもっていることを知らねばならない。このような場合問題になるのは、メキシコ中央高地とメキシコ湾岸低地オルメカの文化領域との両地域で層位的に正確に把握できる文化層をもった遺跡を調査することである。両地域でオルメカ文化に関連をもった文化層が、正確に把握されれば、少なくとも編年的な意味での曖昧さはなくなるであろう。しかし、現在までのところ、遠くはなれた両地域で、このような意味での正確な文化層の比較検討は、かなり困難な仕事である。従って、文化的な内容の比較を通して、時代的な先後関係を推定せざるを得ないわけである。

従来、正確な層位的把握がなかっただけに、メキシコ中央高地帯に認められるオルメカの文化要素を、総体的に「オルメコイデー（類オルメカ文化要素）」とか、オルメカ文化の植民地的発現という意味を含めて、「コロニアル＝オルメカ文化」という言葉で解決してきたことも事実である。しかし、この言葉のもつ意味は、必ずしも正確ではない。このような「類」概念の中に文化的内容を総括するのは、南アメリカの形成期文化、古典文化にも見られるところで、チャビノイデー（類チャビン文化）ティアワナコイデー（類ティアワナコ文化）といった言葉は、そのよい例である。そしてこの言葉のもつ意味内容は、「チャビンの」「チャビン類似」「ティアワナコの」「ティアワナコ類似」といったことを意味している。換言すれば、類オルメカ文化という概念の中にはオルメカ文化の影響によって、発現したものとか、純粋にオルメカ文化、そのものの発現とかいった問題は、まったく、含まれていないのである。つまり、オルメカ文化とは、まったく関係はないが、「オルメカの」であるとか、オルメカ文化に類似したものと推定されるものであるとかといった、極めて曖昧な内容が含まれており、逆の言い方をすれば、まったく、オルメカ文化の内容をもたないものがあったとしても、総体的な類概念に含ませてしまい、これをオルメカ文化の内容として、解釈し、処理しようとする危険が含まれているのである。従って、「オルメコイデー」という言葉は、厳密な意味では、文化的概念として使用することは適当でないと考えられる。それよりも、考古学的資料のどれとどれが、明確にオルメカ文化を代表するものとして抽出するのに適当なものであるかを決定し、その後メキシコ中央高地帯のオルメカの要素といわれるものの中から、明確にオルメカ文化によって造られたもの、また、その代表的なものを決定し、それらの要素を最初に比較検討した上で、オルメカ文化の伝播や影響についての判定規準を考えるべきであろう。一つの文化が、別の地域に大きな影響を与えたのであるから、その本源の文化の内容は

当然、明確にされなければならない。その基礎の上に始めて、影響を与えた地域に発現した、その文化の内容が確定さるべきだと考えるのである。

従って、「類オルメカ文化」とか「オルメカの植民文化」とかいう概念は、少なくともメキシコ中央高地のトラティルコ文化を一つの規準として、オルメカ文化の影響、波及といった問題を考える場合には、不適当な言葉であり、概念である。では、このようなメキシコ中央高地帯へのオルメカ文化発現の問題では、何を判断の規準とすべきであろうか。

これには、前述の如く、両地域において、層位的発掘によった明確な文化的層序を確立することであろう。このための適当な遺跡は或は、少ないかも知れないが、いずれにしても、メキシコ湾岸低地オルメカ文化の編年は何等かの形で修正されなければならないのではなからうか。つまり、ラベンタの文化内容とサン＝ロレンソの文化内容は、同じオルメカ文化であっても、大いに異ったものである。サン＝ロレンソは、早期形成期に既にその根拠をもっていた文化であり、ラベンタは、中期形成期以降に開花発展した文化である。つまり両者の編年的、層序的把握は、重要なポイントとなってくるのである。また、両者の文化内容で、特に宗教的な中心地が作られ宗教上の記念碑的的巨大構造物が構築されるようになってくるのは、むしろ、ラベンタからである。もし、そうだとすると宗教的的巨大遺跡や宗教上の儀礼、その他に関連した記念碑や創作物などは、前の時期のサン＝ロレンソ期が与えた文化的影響よりは、全く異質の影響をメキシコ中央高地帯に与えたものと考えることができよう。つまり、オルメカ文化のもつ時間的な深さは、時の経過のうちに、その文化内容を変化させ、発展させていったことを示しており、従って、オルメカ文化自体の明確な編年を確立しなければ、オルメカ文化の波及した地域での文化的要素の変化や発展を跡づけることはできないのである。このような観点から、メキシコ中央高地帯オルメカ文化を考えてみると、メキシコ中央高地帯には、明確にオルメカ的要素と考えられるものに、大きく分けて二種類のものがあると考えられる。一つは、土器を中心とする遺物群、特に、土器や石彫品、硬玉製品土偶などを主体とする遺物群であろう。他は主に、宗教的な中心地や宗教上の儀礼と関連をもったと考えられる構築遺構群及び人間生活のパターンを示している遺構群であろう。

前者は、メキシコ中央高地でのオルメカ文化の影響やその要素を直接分析できる資料であり、編年の規準には、土器による編年体系が考古学上の基本であるように、オルメカ文化を編年との関係で考える上で最も有効な資料を含んだものである。また、後者は、初期農耕期の様相をもつ早期形成期段階から、人間生活が、どのような形で行われたかも、如実に、しかも具体的に推定せしめる重要な資料である。例えば、住居遺構は、住居の形成は勿論、その構造や単位家族数、更には人口の推定を行わしめる基盤であり、農耕的遺構、例えば、灌漑遺構は、当時の農業社会の生産性の問題を推定せしめ得る資料であろう。つまり人間生活の精神面と物質面との比較検討は、これら巨大遺構群の資材を不可欠にするものであり、メキシコ中央高地帯農耕社会とメキシ

コ湾岸低地帯農耕社会とは、これらの資料によらなければ、比較できないのである。また、ラ=ベンタを中心とする宗教的的巨大遺構群が、どのようにメキシコ中央高地帯に入ってきたかは、最近の報告によって、その一部が解明されつつある。最近の発掘によって、メキシコ中央高地のチャルカチンゴ (Chalcatzingo) 遺跡では、長いプラットフォームを持ち、宗教上の生活に利用されたと思われる部屋の遺構が発見された<sup>17)</sup>。また、宗教儀礼に使用された広場 (ボール=コール) も発見され、これら記念碑的遺構を通して、両地域の文化的相関関係が解明されつつある。これら巨大遺構が中期形成期文化のラ=ベンタ遺跡と密接な関係をもっていることは、具体的事例を通して明確に確認されるわけである。

オルメカ文化のメキシコ中央高地帯への影響は、上述の如く考古学的資料によってのみ、具体的に実証され得るわけであって、文化的内容の分析と両地域の編年の確立が、その場合の基盤にあることは、論をまたないところである。

### 3. メキシコ中央高地におけるオルメカ文化

メキシコ中央高地帯におけるオルメカ文化の要素は、どのように具体的に発現したのであろうか。メキシコ中央高地帯のオルメカ文化の代表的なものは、トラティルコ文化であることは、既に述べたとおりであるが、トラティルコ遺跡の墳墓の副葬品の中からは、いわゆる茶褐色の地に赤色の彩色を施した土器 (red on brown pottery) が発見される。これは、オルメカ文化に特長的な土器ではなく、トラティルコ文化には、この種土器と並んでいわゆる「オルメカ土器」が副葬されている。このことは、同遺跡には、二つの異った文化要素が混在していたことを物語っているわけで、オルメカ様式の土器が現実に存在することは、確かにオルメカ文化が、メキシコ中央高地のトラティルコまで波及していたことを物語っている。つまり、トラティルコの土器からは褐色地赤色塗彩土器系とオルメカ様式系土器の二つの系列が、歴史的に併存した時期があったことが推定されるのである。しかも、この褐色地赤色塗彩土器は、メキシコ湾岸低地オルメカ文化には、全く発見されていない土器であるということが判明したということは、両者の関係について、重要な問題を提示したことになる。つまり、トラティルコにおいて、純粋にオルメカ様式の土器とメキシコ中央高地に発生した褐色地赤色塗彩土器とは文化的にどのような関係にあったのか、また両者は、どのように影響し合ったのか、という問題を提起することになったのである。しかし、トラティルコにおける純粋にオルメカ様式の土器の量は、極めて少なく、全土器総量の約10%ぐらいである。この点を考慮すると、トラティルコ土器文化は、メキシコ中央高地に発生し、そこで造られたものであって、オルメカ様式は、その地に、齎らされたものであるといわざるを得ないのである。しかし、メキシコ中央高地帯でも、トラティルコ以外の遺跡では、オルメ



カ様式土器が、にわかに量的に多くなるものもある。メキシコ中央高地帯における、オルメカ様式の土器の発現には、かなりの変化があり、このような現象が、何故おこったかが、問われなければならない。量的に少ないということは、恐らく、オルメカ様式土器が、メキシコ湾岸のオルメカの故地から、直接持ち込まれたものであったためであって、オルメカ様式土器の製法、文様技法などが、入ってきたのではなかったと解釈したいのである。また、量的に一様でないという問題は、恐らく、オルメカ様式土器が、当時の交易品の対象物として、取扱われたためで、多く取引された場所と旧来の文化的伝統によって、それを拒否した場所との相異によるものであったろう<sup>18)</sup>。

また、メキシコ中央高地帯におけるオルメカ文化の影響と考えられている文化要素に、円筒形印章がある。円筒形印章は、特にオルメカ文化の標識的なものであるとされているが、円筒形印章自体は、メキシコ中央高地文化の特色であって<sup>19)</sup>、むしろ、オルメカ文化には、殆ど存在しないのである。しかも円筒形印章自体、メキシコ中央高地で製作されたものの方が、メキシコ湾岸低地で製作されたものより、はるかに古い年代を示すものであり、オルメカ文化に認められる円筒形印章は、むしろ、メキシコ中央高地文化の影響によって誕生したのではないかと推定されるのである。このように見てくると、メキシコ中央高地文化に認められる早期形成期段階のオルメカ様式、或はオルメカ文化自体は、資料的に再吟味をせざるを得なくなるのではなからうか。特に、メキシコ中央高地帯オルメカ文化の、典型的遺跡とも考えられているトラティルコ文化の内容を、更に深く分析し整理する必要がでてくるのである。また、早期形成期文化に関しては、なお多くの問題が残されているにしても、中期形成期段階におけるオルメカ文化の影響の問題は、更に重要な課題を含んでいると言わなければならない。

中期形成期段階でのメキシコ中央高地帯の土器群や人形土偶の型式は、サカテンコ遺跡やエルアルボリョ (El Arbolillo) 遺跡のこれらのものが殆どその区別をつけるのがむずかしいくらいよく似たものであるが、中期形成期段階でのメキシコ中央高地帯に及ぼしたオルメカ文化の影響といったものを分析するとなると、極めて困難な仕事となってくる。というのは、メキシコ中央高地帯における中期形成期段階での土器の系譜には、オルメカ文化の影響といったものを明確に示めし得る資料が、現在のところ少くないといっても過言ではない。つまり、オルメカ文化は、メキシコ中央高地帯で中期形成期段階に、メキシコ中央高地帯の土器製作に対しては、何等の影響力ももたないものになってしまったと考えざるを得ない程、その様式は消失してしまうのである。しかし、オルメカ文化は土器製作に関しては、その影響力を失ってしまったといっても別の面、特に石彫品や浮彫技法、浮彫りのモチーフなどの点にその影響力を及ぼしていったと考えられる。特に、宗教上の巨大遺構が解明された、ラベンタ遺跡には、多くの石彫品や宗教上の遺構が発見され、この地が古くから宗教的な中心地として、多くの巡礼者達を集めていたことが判明した。例えば、後にメキシコ中央高地帯の「雨の神」となったトラロック (Tlaloc) 神

の目の表現はオルメカ文化の影響によって生れたものであり、また、豹や鷲などのモチーフの中で、オルメカ文化の影響のもとに生れたものも多いようである<sup>20)</sup>。

つまり、メキシコ中央高地帯文化を詳細に分析していくと、中期形成期段階では、宗教的な面に、大きなオルメカ文化の影響を認めることができるようである。しかし、編年を行う場合の規準に最も適した土器文化の上には、必ずしも大きな影響はなく、むしろ、メキシコ中央高地帯文化が、オルメカ文化へその影響を及ぼしたのではないかと思われるのである。

では、前述の如き多くの問題を提起しているオルメカ文化が、メキシコ中央高地帯に及ぼした影響といったものは、一体どのように解釈すればよいのだろうか。換言すれば、オルメカ文化のメキシコ中央高地帯での発現に対して呼称される「高原オルメカ文化」は、どのような本質をもったものなのか、といった結論とも言える問題を考えてみたい。

早期形成期の段階では、メキシコ中央高地帯にトラティルコを標識とする様な地方的な文化が形成されていたが、この時期にメキシコ湾岸から、オルメカ文化の浸透と考えられる文化的影響が見られるようになった。そして、それは、メキシコ中央高地の地方的文化であったトラティルコ文化にまず最初の影響を及ぼし始めたが、この段階でのオルメカ文化の影響は、必ずしも絶対的、圧倒的であったとはいえない。ただ、メキシコ中央高地では、早期形成期の段階で、オルメカ文化の影響を或る程度まで受けざるを得ないような何等かの事態があったことが推定される。換言すれば、メキシコ湾岸からの特異文化の紹介に対して、メキシコ中央高地人達のオルメカ文化への適応が開始され、更にそれが、オルメカ文化への同化的な傾向となって現われるためにはその後の長い時を必要としたのであろう。しかし、早期形成期段階に、オルメカ文化の影響が、メキシコ中央高地帯に認められるといっても、では、具体的にどのような方法で、或は、どのような径路を通して、その文化は波及し、伝播したのであろうか。

この問題に対しては、様々な意見が出されている。つまり、宗教的な観念の広がり、軍事的な征服、植民地化の実行、商業的交易などのためであったとする説である。これらの説は、いずれも、それぞれ特色をもち、かつ説得力をもつものであるが、例えばある地域の宗教的観念が、いきなり他の地域に受け入れられるとは考えられないし、軍事的征服や植民地化の努力といったものが、文化的なものの創造者として、出現し得るか、どうかについては、まだ、結論は出せないのではなかろうか。このような点を考えると、商業的な交易が、メキシコ湾岸とメキシコ中央高地帯との間で行われ、商業的交易を通じて、オルメカ文化が、広くメキシコ中央高地へ、広げられていったのではなかろうか。しかし、商業的交易が、早期形成期段階で開始されたとなると、交易のための対象物が特定されなければならない。つまり、現代的な商取引は、紀元前2000年頃から1000年頃では存在しなかったであろうし、それが物々交換か、或は、大規模な商業的取引であったのかを解決し得る考古学的資料はない。しかし、当時は正に石器時代である。人々の日常生活の道具は、石器を主体とするものであったことは論をまたない。もし、そうであるならば、

石器の素材たる石材は、交易のための最も重要な対象物たり得たわけであろう。こうして、石器製作に不可欠の石材は、形成期段階では、正に黒曜石であったと考えることができよう。また、形成期における、ある特別な農耕村落は、当時重要な商業都市としての機能をもっていたし、同時に、宗教的な中心地としても機能していた。恐らく各地に散在した農耕村落の中で、宗教的、商業的な中心となり得るような組織と規模をもった特別な農耕村落、都市といったものが作られそこでは、初源的ではあったろうがいわゆる物資の流通が、或る程度、行われていたと考えられる。この傾向は、形成期中期以降からは、一般化するようであるが、早期形成期においても、特定の物資を小規模に交易する中心地が形成されていたことは、想像に難くない。そして、この時点での主要交易品が、上述の如く黒曜石であったと推定されるのである。交易される物資は、勿論、この他に食料品を主としたものもあったことは当然で、新大陸では、山野に自生した食用植物、カカオ豆などが主に交易されたと考えられる。

メキシコ湾岸低地オルメカ文化は、恐らく交易を通して、その文化的影響を各地に波及していったであろうと推定されるが、現実には実際にオルメカ文化を知り、その中で生きる人間（つまり、オルメカ人）が、メキシコ中央高地にやってきた筈である。彼等は、その時、オルメカ文化の根拠地で製作された多くの製品を滞同した筈である。この中には、オルメカの土器や翡翠、蛇紋岩などで製作された、いろいろなペンダント、石偶など、常に、持ち運びに適した製品が、各地に齎らされたと考えられる。実際に黒曜石が、これら品物とどのように交換されたかについては、勿論、推測の域を出ないが、黒曜石は、ある産地のものが、四方に散らばっても、それが、どこの産地のものであるかが、おおよそ推定できる石材である。このことは、メキシコ中央高地でテオティワカン（Teotihuacan）産の黒曜石がトラティルコを始め、形成期段階のメキシコ中央高地文化の石器の素材を提供していた事実を見てもわかるのである。こうして、黒曜石を媒介とした交易は、オルメカ文化その物をメキシコ中央高地帯に齎らすことになったと考えられる。従って、メキシコ中央高地帯に発現したオルメカ文化の資料の中には、純粹に海岸オルメカ文化の代表的なものと、いわゆるオルメカ文化の影響下に、メキシコ中央高地帯で製作された、オルメカ的要素をもったものがあることは、当然なことであろう。

考古学的資料が増大するにつれて、オルメカ文化の内容は、更に解明されてくるであろうが、それは、一方では資料処理の混乱をまねいているのも事実である。メキシコ湾岸の熱帯低地に発生したオルメカ文化の、メキシコ中央高地帯での発現とか、影響とか、といった言葉には、純粹に本拠地の文化内容その物、或は、それらの影響下で、別の地域で形成された文化内容とがあることを忘れてはならない。形成期段階における、交易を通してのオルメカ文化のメキシコ中央高地帯への浸透に対しては、多くの資料の中に、前述のような、大きくわけて、二種類のものが存在するのではなからうか。従って、両地域の文化内容の分析と整理は、この問題を考える場合の前提条件である。しかし、オルメカ文化とメキシコ中央高地帯文化との総体的な比較には、

資料の取扱いに、前述のような基本的資料の処理方法が必要であるということと、編年規準を確立した上での資料の分析を必要とするのであるということが結論づけられねばならない。

#### 4. む す び

メキシコにおけるオルメカ文化の問題は、多くの未解決な問題を残しているが、その文化の波及した地域は、何も、メキシコ中央高地帯だけに限ったことではないのは、前述の通りである。オルメカ文化が、波及した地域では、多かれ少なかれ、在来文化とオルメカ文化の関係が議論の対象になり、オルメカ文化が、マヤ文明という壮大な新大陸古典文明に与えた影響については、更に大きな論議がなされている。しかし、トラティルコを中心とするメキシコ高地帯でのオルメカ文化の影響に対する分析は、これら多くの地域に及んだオルメカ文化の影響を解明する一つの手がかりを与えてくれるものと考えられるところから、この小論を草した。しかし、両地域における資料は、以外と少なく、特に、最近の発掘資料について、報告書その他を入手することが、極めて困難であったために、意に満たない論稿になったことを遺憾としている。他日を期したいと思っている。

#### 〔註〕

- 1) Willey, G. R.: *An Introduction to American Archaeology*. volume one. North and Middle America. pp. 78~108. 1966. New Jersey.
- 2) Covarrubias, M.: *Indian Art of Mexico and Central America*. 1957. New York.
- 3) Piña Chān, R.: *Chalcatzingo, Morelos*. Informes 4. Instituto Nacional de Antropología y Historia. 1955. Mexico.
- 4) つまり、編年的に正確な時代的位置が確立されない限り、別々の地域の文化内容を比較することはできない。同時代に、別々の地域に全く別の文化が開花しても、その文化内容は比較の対象になり得るとしても、別の場所での同様式文化を比較する場合には、両者の時間的先後関係は重要な要因になるという意味である。
- 5) Willey, G. R. op. cit. pp. 97~105. 1966.
- 6) Reed, A. M.: *The Ancient Part of Mexico*. pp. 228~236. 1966. London.
- 7) Drucker, R., F. Heizer and R. H. Squire: *Excavations at La Venta, Tabasco*. Bureau of American Ethnology Bulletin 170. 1955. Washington.
- 8) Coe, M. D., R. A. Diehl and M. Stuiver: *Olmec Civilization, Veracruz, Mexico: dating of the San Lorenzo phase*. Science, 155. No. 3768. 1967. Washington.
- 9) Coe, M. D., R. A. Diehl and M. Stuiver: *ibid.* 1967. Washington.
- 10) Porter, M. N.: *Tlatilco and the Preclassic Cultures of the New World*. Viking Found Publications in Anthropology. No. 19. 1953. New York.
- 11) Tolstoy, P. and L. I. Paradis: *Early and Middle Preclassic Culture in Basin of Mexico*. Science 167. 1970. Washington.
- 12) Grove, D. C.: *The Hightland Olmec manifestation: A consideration of what it is and isn't*

- in* Mesoamerican Archaeology New Approaches (ed) N. Hammond pp. 109~128. 1974, Austin.
- 13) Fuente, B. de la : El Arte Olmeca. *in* Artes de Mexico. No. 174. 1972. Mexico.
  - 14) 新大陸の形成期文化の土器のうちで、文様技法、製造技法上、このような特色を示す土器はアメリカの他の地域からも発見され、広大な地域に等質的な文化が広がっていたことを推定させる。
  - 15) Porter, M. N. : op. cit. 1953. New York.
  - 16) Joralemon, P. D. A Study of Olmec Iconography: Studies in Pre-Columbian Art and Archaeology, No. 7. pp. 26~27. 1971. Washington.
  - 17) Grove, D. C. : Chalcatzingo, Morelos, Mexico: a re-appraisal of the Olmec rock cavings, American Antiquity Vol. 33. No. 4. pp. 486~491. 1968.
  - 18) 土器が交易品の対象となったかどうかには、なお多くの疑問があるが、特殊な土器は、広範囲にばらまかれている例もある。例えば、メキシコ中央高地のテオティワカン式三足土器は、ガテマラのカミナリフェ遺跡からも発見されている。
  - 19) Joralemon, P. D. : op. cit. pp. 26~27. 1971. Washington.
  - 20) Grove, D. C. : op. cit. 1974. Austin.